



|              |                                                                             |
|--------------|-----------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 引用構文と「トハ文」                                                                  |
| Author(s)    | 岩男, 考哲                                                                      |
| Citation     | 日本語・日本文化. 2006, 32, p. 63-72                                                |
| Version Type | VoR                                                                         |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/10139">https://doi.org/10.18910/10139</a> |
| rights       | 本文データはCiNiiから複製したものである                                                      |
| Note         |                                                                             |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

&lt;研究ノート&gt;

## 引用構文と「トハ文」

岩男 考哲

### 0. はじめに

本稿は、引用を表す助詞「ト」に助詞「ハ」が後接してできたと考えられる「トハ」という形式が用いられている文についての考察を行うものである。しかし、上記のような「トハ」には以下に見られるように、幾つかの、やや性格の異なる用法が存在する。

- (1) あの真理が一ヶ月やそこらの停学で氣落ちしているとは思えない。  
(勉強)
- (2) こんなに急に乗れるようになるとは意外であった。  
(あの)
- (3) ヘルペスとは水ぼうそうと同じ菌で、疲れていると神経に沿って出てく  
る。  
(パイ)

先行研究では、「トハ」を用いた表現は、大きく(1)-(3)のように3つのタイプに分けられてきたと言える。(1)はいわゆる引用構文において引用句を「ハ」で取り立てたものと考えられる。それに対して(2)が本稿が主な考察の対象とする「トハ」である。以下、(2)のような本稿が考察の対象とする文を特に「トハ文」と呼ぶことにする<sup>1)</sup>。このトハ文が具体的にどういった性格のものであるかは次節で述べるが、(1)との違いを極簡単に述べると、(2)の場合は(1)と違い、述部が(引用句を要求することがある)発話や思考を表す動詞ではなくなっているという点が指摘できる。これは、「トハ」に前接する部分が((1)と異なり)述部に要求された要素ではなくなっている、ということを意味する。続いて(3)は、(2)の「トハ」が文的な表現を受けていたのとは違い、「トハ」が名詞(句)を受ける表現である。これと(2)の「トハ」との関係も重要な問題ではあるが、これは「トイウノハ」「トイウコトハ」等との関係という点も関わってくる

問題であるため<sup>2)</sup>、本稿ではこのタイプの「トハ」について詳しくは述べない。詳細は別稿を用意したい。

このように「トハ」を用いた表現は、大きく3つに分類されてきたわけであるが、既述のように本稿では、(1)-(3)のうち、特に(1)と(2)のタイプのものに注目する。これら2タイプの表現間の関係を考察することで、この両者が拡張関係にあることを示す。

## 1. 「トハ」が用いられる諸表現

では具体的に、トハ文についての考察を行うことにする。

既述のように、「トハ」という形式を用いた表現は、本稿がトハ文と呼ぶものその他にも幾つか存在する。

以下では、先行研究の知見も踏まえつつ、これらの表現における「トハ」という形式の違いを述べることで、本稿が考察の対象とするトハ文の特質を明確にする。

### 1.1 引用構文における「トハ」

まずは、(1)のような引用構文の引用句を「ハ」で取り立てたと考えられる性格のものを見ていくことにする。このタイプのものには、(1)の他に以下のようないわゆるものが存在する。

(4) 私は、今、三十一歳になったばかりです。

まさか三十一歳がこんなものだとは思っていなかったね。 (パイ)

(5) あなたを精神病でないとはいません。 (きら)

このタイプの文は、述部に「言う」「思う」等の発話・思考動詞やそれに相当するものが位置するという特徴が挙げられる。つまり「～ト言う。／思う。」等の引用構文の引用句(～ト)を助詞「ハ」で取り立てたものとして捉えることが可能である。そういう意味では、この場合の「～ト」は、動詞の要求する要素であるとも考えられる。従って、このタイプの文の「Xトハ」にあたる部分は、動詞の要求する要素の一部を取り立てたものと捉えることが可能である。

また、このことと関連して、このタイプの場合、「トハ」から「ハ」を取り除く

ことが（人によっては多少の違和感があるかもしれないが）可能だと言えそうである<sup>3)</sup>。

- (1') あの真理が一ヶ月やそこらの停学で気落ちしていると思えない。
- (4') 三十一歳がこんなものだと思っていなかつた。
- (5') あなたを精神病でないといえません。

更には、このタイプの文の「トハ」は、「ト」と「ハ」の間に他の要素を挿入することや「ハ」を他の助詞と置き換えることが可能である。これらの諸現象から見て、このタイプにおいては、「ト」と「ハ」の結びつきは（後に見るタイプのものに比べ）弱いことが分かる。

- (1'') あの真理が一ヶ月やそこらの停学で気落ちしているとまでは思えない。
- (1'') あの真理が一ヶ月やそこらの停学で気落ちしているとも思えない。
- (4'') 三十一歳がこんなものだとまでは思っていなかつた。
- (4'') 三十一歳がこんなものだとも思っていなかつた。
- (5'') あなたを精神病でないとまではいえません。
- (5'') あなたを精神病でないともいえません。

また、元が引用構文であることから、「トハ」に前節する部分に終助詞が生起することもある。これも、以下で見るトハ文には見られない特徴である<sup>4)</sup>。

- (6) 彼に比べれば、オランウータンの方が、ずっと魅力的だ。  
どうして、あんなことをいちいち口に出すのかね。  
しかし、私は、この後に、だから日本の男はもてないんだよ、  
とは続けない。 (AMY)

## 1.2 トハ文の「トハ」

次に、本稿がトハ文と呼ぶ表現を観察する。(2) がその例に相当する。

後に述べるように、トハ文における「トハ」は、引用構文におけるそれと異なり、「ト」と「ハ」の間の緊密性が増している。寧ろ、「ト」と「ハ」の緊密性が増し、「トハ」でひとまとまりの形式と認識されることで、引用句を「ハ」で取り立てたものと異なる用法へと広がっていった（つまり、引用構文以外の環境でも使用できるようになった）ものと推測される。

それと関連して、以下で見ていく例からも明らかなように、既にこの「トハ」の「~ト」は述語の要求する要素とは言えなくなっていることも分かる。その証拠に、以下で観察するトハ文の述部は、発話・思考動詞に代表されるような引用構文を形成する動詞（引用句を要求することがある動詞）ではなくなっている。このことから、1.1と1.2の間では、「トハ」に加え、「トハ」に前接する部分の性格も異なっている（思考・発話動詞に要求された要素ではなくなっている）ことが分かる。

では、具体的に例を見ながら、本稿がトハ文と呼ぶタイプの文を観察していくことにする。トハ文には（2）も含め次のような例が存在する。

(7) 「帰りたい」とけしからん。 (藤田 2000)

(8) 夢の中まで働いているとは、すばらしい。 (パイ)

まず、先行研究でも指摘されているように、このトハ文には、「トハ」から「ハ」を取り除くことができないという特徴がある。

(2')\* こんなに急に乗れるようになると意外であった。

(7')\* 「帰りたい」とけしからん。

(8')\* 夢の中まで働いていると、すばらしい。

また、先行研究では触れられていないが、この他に、トハ文においては「トハ」の「ト」と「ハ」の間に何か要素を挿入したり、「ハ」を他の助詞と置き換えたりすることも不可能となっているという特徴がある。この点も1.1の引用構文における「トハ」という形式との違いとして指摘できる。

(2'')\* こんなに急に乗れるようになるとまでは意外であった。

(2''')\* こんなに急に乗れるようになるとも意外であった。

(7'')\* 「帰りたい」とまではけしからん。

(7''')\* 「帰りたい」ともけしからん。

(8'')\* 夢の中まで働いているとまでは、すばらしい。

(8''')\* 夢の中まで働いてるとも、すばらしい。

この事実は、1.1の引用構文における「トハ」という形式に比べ、このトハ文における「トハ」は、その緊密性が増している（「トハ」で一語となっている）、ということを物語っていると言えよう。

また、「トハ」の前接部分に終助詞が生起しない、といったある種のムード制約が見られる。この事実は、既にトハ文は所与の言葉を再現する引用構文としての機能を失いつつあることを表していると言える<sup>5)</sup>。

(2'')\*) こんなに急に乗れるようになるよとは意外であった。

(7'')\*) 「帰りたいね」とはけしからん。

(8'')\*) 夢の中まで働いているよとは、すばらしい。

ただし、トハ文の「トハ」に前接する部分に終助詞の制約は見られるものの、以下のように、命令形であれば生起できるように思われる。

(9) 「帰れ」とはけしからん！ せめて「帰ってください」と言え！

この例は、述部が引用句を要求することのある発話・思考動詞ではないこと等から、本稿がトハ文と呼ぶタイプのものであることが分かる。そのトハ文においても、命令形という極めて独立性の高い表現が生起し得るということは、やはり、トハ文と引用構文との間につながりがあることは否定できない。しかし、命令形が生起できるとは言え、終助詞の制約の点を考えると<sup>6)</sup>、この両者は同一のものというわけではなく、やはりトハ文における「～トハ」の部分は、引用構文における引用句としての性格がやや薄れつつあるものと考えるべきであろう。

以上の考察から、引用構文の引用句を「ハ」で取り立てたものにおける「トハ」という形式と、本稿がトハ文と呼ぶもの<sup>7)</sup>における「トハ」という形式との間の、いわば緊密性とも言うべき性格の違い、延いては、トハ文そのものの性質の一端<sup>8)</sup>が明らかになったものと思われる。

## 2. 引用構文とトハ文の意味的な関係

前節では、引用構文の引用句を「ハ」で取り立てた表現と、本稿がトハ文と呼ぶ文との差異について考察を行った。次に本節では、この両者の間の意味的な関係について考察を行う。

塩入(1994)、藤田(2000)では、トハ文について「トハ」に前接する事柄は、「意外」なものでなければならぬと指摘されている。ここでは、この「意外性」とでも呼ぶべきトハ文の意味について考察を行う。

まず、藤田(2000)の例を挙げ、トハ文の提示する「意外性」というものにつ

いて観察する（以下の例・文法性判断は、何れも藤田（2000）のもの。ただし、例文番号は本稿にあわせてある）。

- (10) あのヒゲの男が言語学をやっているとは意外だ。
- (10')\* あのヒゲの男が言語学をやっているとは思ったとおりだ。
- (11) 「知りませんでした」とは意外だね。
- (11')?「知りませんでした」とは思ったとおりだね。

これらの例について藤田（2000）は「『～トハ』でとり上げられる事柄は、意外なものでなければならぬ（p.466）」と述べる。確かに、用例を観察していくと、上記の（10）（11）、そしてトハ文全体において、この「意外」とも呼ぶべき意味が感じられる。以下では、この「意外」という意味の発生する理由について、引用構文からの拡張という観点を交えながら分析を行っていく<sup>9)</sup>。

そこで注目したいのは、1.1 で見た引用構文における述部である。前節までで観察してきた例からも分かるように、1.1 のタイプ、つまり、まだ引用構文における引用句を「ハ」で取り立てるという性格が色濃く残るタイプの表現の述部（発話・思考動詞に代表されるもの）は、否定形へと大きな偏りを見せる。手元のデータでは、1.1 のタイプ全 67 例のうち、まさに 62 例の述部が否定形である。その否定形の述部の主な例を以下に挙げる。

|        |       |        |                       |
|--------|-------|--------|-----------------------|
| 言えない   | 思わない  | 思えない   | 言えない                  |
| 思っていない | 言いがたい | 思えなかった | 言い切れない                |
| 思わなかった | 見られない | 続けない   | 思ってもみなかった             |
| 知らなかった | 言われない | 言わない   | 認めない 等 <sup>10)</sup> |

このことから考えられることを以下で述べる。述部の発話・思考動詞が否定形をとるということは、これらの例において、「トハ」に前接する部分は話者が（これから発言する（した）こと、思考する（した）こととして）認識していなかった・想定していなかった、ということを表していると言える。つまり、1.1 の引用構文の引用句を「ハ」で取り立てた表現の大部分（述部が否定形のもの）は、話者の認識・想定の外にあった事柄を「トハ」という形式を用いて提示する表現

として機能している、と捉えることが可能なのである。

こうして考えることで、トハ文がいわゆる「意外性」を帯びる理由も明らかになる。引用構文において「トハ」という形式が用いられている場合、その大部分は、話者にとって想定外の事柄であることを述べるものであった。これは、トハ文における「意外」という意味とリンクする。つまり、話者にとって想定外の事柄である、ということは、話者にとって「意外」であることに他ならないのである。

ただし、引用構文において「トハ」を用いた場合は引用構文全体で想定外であることを表しているのに対して、トハ文の場合は、「～トハ」の部分のみで「意外」の意味を表していると考えられる<sup>11)</sup>。これは、トハ文における「トハ」の文末での用法を見ると明らかである。この場合、述部が存在しなくとも、「～トハ。」のみで「意外」である、といった意味を表していることが分かる<sup>12)</sup>。

- (12) こんなにビールがうまいとはね。  
(13) あいつがこんなにがんばるとはなあ。

この現象については、引用構文においては述部が否定形をとることによって表されていた意味が、引用構文以外の表現（つまり、トハ文）へと拡張していく過程で、この「想定外＝意外」という意味が「～トハ」という形式そのものの意味として定着していったものと考えることが可能である<sup>13)</sup>。

このように、引用構文とトハ文との間には、「トハ」という形式面における共通性、そして、命令形という極めて独立性の高い表現を「トハ」で受けることができるという共通性だけではなく、意味の面における繋がり（拡張関係）をも想定することが可能なのである。

### 3. おわりに

本稿では、主に引用構文とトハ文との関係に注目して考察を行ってきた。

本稿の考察により、この両者の間には一種の拡張関係を想定することが可能であることが明らかになったことと思う。本稿の冒頭でも述べたように、今後は、この両者と本稿では触れられなかった、「トハ」が名詞（句）を受ける場合の文との関係について考察を行わなければならない。

## 註

- 1) 「トハ文」とは、塩入(1994)の用語である。このタイプの文を扱った研究の代表的なものに、塩入(1994)、藤田(2000)がある。
- 2) 青木(1992)、野田(1996)は、このタイプの「トハ」を「トイウノハ」「トイウコトハ」等の省略と捉えている。
- 3) 少なくとも、1.2で見るトハ文に比べると「ハ」を取り除いた後の文の容認度の差は明確である。
- 4) 本稿がトハ文と呼ぶ表現の「トハ」に前接する部分にムード制約があるという指摘は、既に藤田(2000)に見られる。
- 5) 表せる表現に制約がある、ということはつまり、再現できる表現に限界がある、ということである。よって、所与の言葉を再現するための表現としては十分に機能できないものとなっていることになる。
- 6) トハ文の「トハ」に前接する部分に終助詞の生起は不可能であるが、命令形の生起は可能であるという事実は、命令形のような活用形の表す聞き手めあて的な意味と、終助詞等の表すそれとの質の違いを表していると言えるのかもしれない。この終助詞のレベルと命令形のレベルとを同一に扱うべきか否かといった問題については、南(1974)等に既に指摘がある。
- 7) 藤田(2000)はこのトハ文を更に2つに分けて詳細な考察を行っている。
- 8) 一見、X部に名詞(句)が生起しているかのような表現であっても、それが一語文のような、文相当のものとして用いられているのであれば、トハ文とすべきだろう。以下の例は、前者が、(3)のような「トハ」に名詞(句)が前接するタイプのもの、後者がトハ文である。
 

例)・水とは、人間が生きていくうえで欠かせない物質である。  
 「水とはなんだ！」ちゃんと「水をください」と言え！
- 9) もちろん、ここでいう「意外」「意外性」といった意味が、厳密にはどのようなものであるのか、という点についての考察も行わなければならないが、本稿ではその点には触れない。今後の課題としたい。
- 10) なお否定形ではない述部は「言える・思う(2例)・思った・知っていた」である。これらは、文中では主に従属節において使用され、例え主節であっても疑問表現として用いられる、といった特徴が見られた。
- 11) 引用構文の段階でも既に(「トハ」という形式が用いられている場合は)「～トハ」のみで、想定外であるという意味を表していると捉えることも可能かもしれない。しかし本稿では、引用構文で「トハ」が用いられる場合、述部が常に否定形であるわけではない(つまり、述部まで至って始めて、想定外であるか否かが分かる)、

という点を考慮し、「トハ」を用いた引用構文はそれ全体で想定外の事柄を表しているものとして扱うこととした。

- 12) これについては、文法化(grammaticalization)における、「語用論的強化(pragmatic strengthening)」も関わっているものと思われる。
- 13) ただし、「意外」という用語で議論を進めていくと、その場合、(10) や (11) のような表現は余剰的な表現である、ということになる(益岡隆志先生のご指摘による)。この点については、「意外」という用語での説明の妥当性も含め、今後更なる考察が必要である。

### 用例出典

- (あの) = 『あのころ』(さくらももこ／集英社)  
 (きら) = 『きらきらひかる』(江國香織／新潮文庫)  
 (パイ) = 『パイナップルヘッド』(吉本ばなな／幻冬舎文庫)  
 (勉強) = 『ぼくは勉強ができない』(山田詠美／新潮文庫)  
 (AMY) = 『AMY SAYS』(山田詠美／新潮文庫)

### 参考文献

- 青木伶子(1992)『現代語助詞「は」の構文論的研究』笠間書院.  
 塩入すみ(1994)「『トハ』文の主節の述語について」『現代日本語研究』1、pp.75-84、大阪大学.  
 丹羽哲也(1994)「主題提示の『って』と引用」『人文研究』46-2、pp.79-109、大阪市立大学.  
 野田尚史(1996)『「は」と「が』』くろしお出版.  
 藤田保幸(2000)『国語引用構文の研究』和泉書院.  
 益岡隆志(1987)『命題の文法－日本語文法序説』くろしお出版.  
 南不二男(1974)『現代日本語の構造』大修館書店.

〈キーワード〉 引用構文、トハ文、トハ、意外性

## Quotative Construction and “*Towa* Construction”

Takanori IWAO

This paper proposes that there is an expansive relation between quotative construction with a particle “*towa*” and “*towa* construction”.

There are three reasons for this proposal.

- 1) Both constructions include particle “*towa*”.
- 2) The imperative sentence sometime appears in both constructions.
- 3) There is a semantic connection between both constructions.

Based on these, this paper insists that there is an expansive relation between quotative construction with a particle “*towa*” and “*towa* construction”.